

2019年度 健育会グループ 医師研修会・懇親会が開催されました。

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



2019年10月26日（土）、「2019年度 健育会グループ 医師研修会・懇親会」が開催されました。今回の会場は、同9月12日に開業したばかりのオークラ プレステージタワー1階にある平安の間Ⅰ。医師研修会ではセコム医療システム顧問の関塚永一先生のご講演いただき、医師を中心に各病院から出席した約70人が、熱心に耳を傾けていました。

冒頭の開会のあいさつでは、私が下記のような話をしました。

関塚永一先生は、私と医局入局同期の古い知り合いです。若い頃は臨床と研究に力を注いでいた先生でしたが、国立病院機構埼玉病院（以下、埼玉病院）の院長として、経営を改善し、黒字化。大病院へと発展させた立役者になりました。医局時代は特に研究に熱心だった関塚先生が、これほど立派な院長になるとは、当時夢にも思いませんでした。そんな関塚先生が、院長として見事な手腕を発揮されたということは、ものすごく経営の勉強をされたはず。関塚先生の実体験を書かれたさまざまな記事を読んでもみると、多くの経営書に基づいているのではないかと想像しています。また、ご自身の経営哲学の一つに従って、毎朝一番に病院の入り口に立ち、患者さんに「おはようございます！」とあいさつしていたそうです。勉強だけでなく、実践的な経営に取り組まれていました。

私と関塚先生は、医局で故土屋雅春先生という昭和最後の大教授に師事しました。土屋先生は、研究に関して論理性を非常に追求される方でした。少しでも論理的な矛盾などがあると、厳しく指導されたことを覚えています。経営にも論理的な思考回路が重要です。若い頃に大学病院でそうした指導を受けたことも、関塚先生のこれまでの素晴らしい実績につながっているのではないかと思います。今や超有名人の関塚先生をお招きして、勉強から始まり、自らの実体験をベースにした院長のノウハウを教えてください。



座長は健育会顧問の岩尾總一郎先生に務めていただきました。



今回、関塚先生にご講演いただいた演題は「チーム医療における医師のリーダーシップ『医師が持つべき論語とそろばん』」。



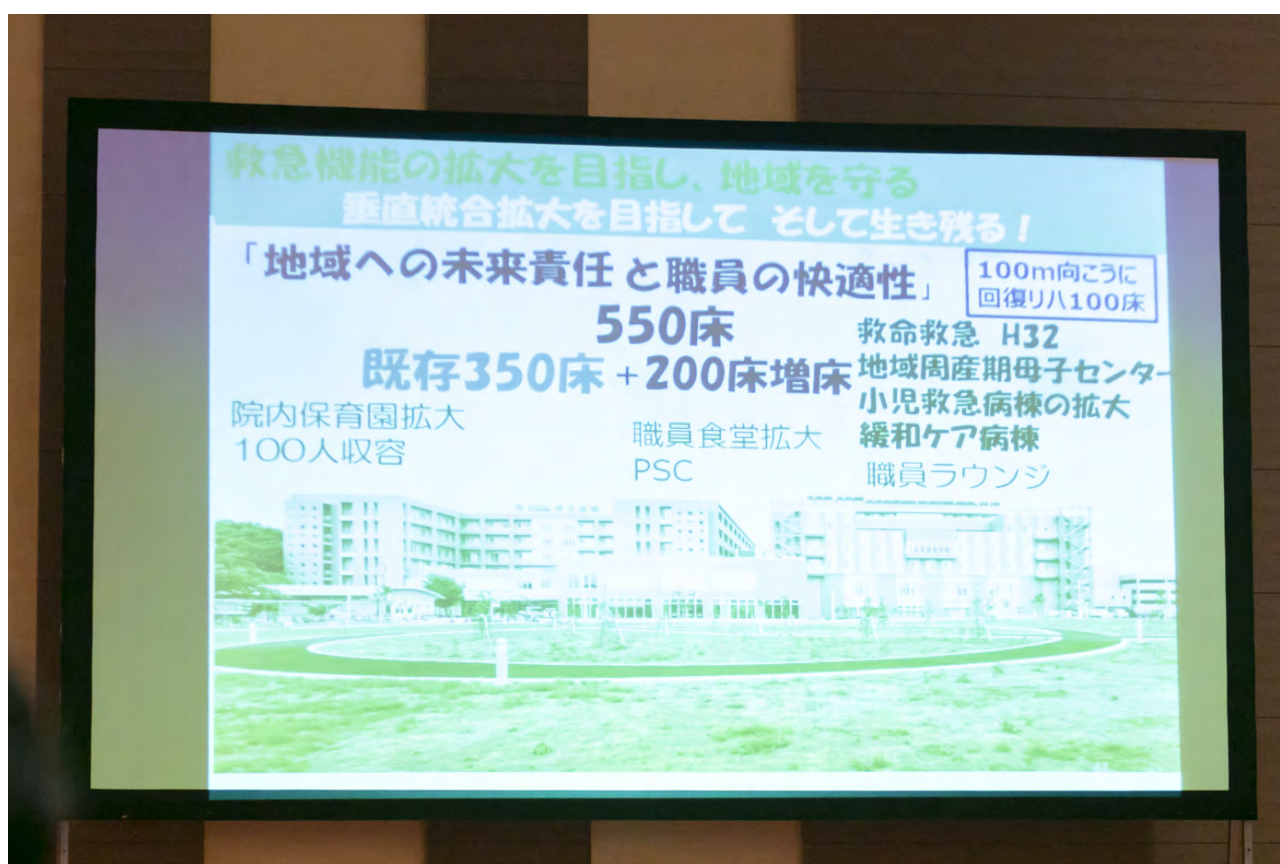
関塚先生は、まず日本主義の父と呼ばれる渋沢栄一や経営学者のピーター・ドラッカー、野口英世などの格言を引き合いに出し、「患者さん、職員、地域を幸せにできなければ、病院の存在意義はない」と説きました。そして患者さんに対しては、家族主義が大切だと語りました。家族であれば最後まで見捨てることはなく、同時に必ずしも良い結果を保証することはできないものの、プロフェッショナルとして最善を尽くさなければいけないとのこと。経営者の使命は、会社や部下の幸せを本気で考え、職員同士が楽しく働ける環境作りをすることが重要だと言います。論語には「楽しんでしまう人には、最後はかなわない」という意味の一節があるそうです。

前述したように関塚先生は、院長在職時の7年間、毎朝7時30分から8時30分まで病院の玄関に立ち、患者さんと職員にあいさつし続けていました。関塚先生から先に「おはようございます」と声をかけると、患者さんや職員からあいさつが返ってくるので、もう一度「おはようございます」とあいさつしていたそうです。1時間で500人以上にあいさつするので、延べ200万回以上あいさつした計算になります。目指していたのは、患者さん、職員、地域の笑顔。関塚先生は、ご自身の造語で「徹凡非凡」という言葉を座右の銘にしており、平凡に徹することは非凡であるという意味とのこと。パナソニック創業者の松下幸之助も「平凡の積み重ねが、非凡を生む」と言っていたそうです。



こうした実体験に加えて、「病院経営を因数分解する『収益＝患者数×単価』」や「イールドマネジメントの発想」「レセプト1枚見ないで、病院経営を語るな！ レセプトは全職員の努力の結晶」「病院のKPIが一目でわかる仕組み作り 病院経営は、みんなで明るく」「断らない救急を実現できなければ、地域の信頼は得られない」といった原理なども紹介。

さらに、近年重要性が高まっている地域医療に関して、まず地域の医師会に積極的に参加し、顔を見せる医師同士の連携に力を入れることが重要だとお話されました。ICTを活用するにしても、その前に十分な関係を築いておかなければ連携はうまく機能しないとのこと。埼玉病院では、周辺の4医師会との共働研究により、24時間365日オンラインで即座に検査・診療予約ができる地域医療連携システム「C@RNA Connect（カルナコネクト）」を導入しているそうです。その結果、病診連携が強化され、患者紹介・逆紹介率が向上。病診連携の強化は、地域医療の質の向上につながると説明されました。



その後の質疑応答では、ねりま健育会病院の酒向正春先生を皮切りに竹川病院の田中眞先生、西伊豆健育会病院の仲田和正先生、湘南慶育病院の鈴木則宏先生、石川島記念病院の重田洋平先生の各院長が、それぞれの病院での状況や課題に関して、関塚先生からアドバイスをいただきました。



講演の後の懇親会には、研修会に出席された先生方に加えて、そのご家族なども参加されました。乾杯の音頭を取っていただいたのは、10月1日から健育会の副理事長に就任した宇都宮啓先生。宇都宮先生は、33年間厚生労働省に在籍され、7月までは健康局長を務められていました。平成20年と同26年の診療報酬改定、同24年の介護報酬改定に関わったご経験があり、今後は現場の立場から厚生労働省に働きかけていただけると期待しています。



懇親会は、着席ビュッフェで行われましたが、会場内の各所に参加者同士で談笑する姿が見られ、グループ内の交流の輪が広がったのではないかと思います。また、ホテルオークラの和洋中の料理が、歓談の時間に華を添えてくれました。



懇親会の中頃には、今年度健育会に入職した医師から自己紹介を兼ねたあいさつがありました。新たに仲間に迎えたのは、前述の宇都宮先生と講演で質問した重田先生に加えて、竹川病院の奈良崎智子先生、西伊豆健育会病院の阿部純也先生と富永新平先生、石巻健育会病院の佐々木盛力先生、花川病院の井口大暢先生、石川島記念病院院長補佐の池崎清信先生、茅ヶ崎セントラルクリニックの仙賀裕先生、ねりま健育会病院の真崎翔一先生、佐藤絵梨先生、山本理恵先生、湘南慶育病院副院長の寺山靖夫先生、志田敦男先生の計14人。経歴や経験、専門分野はさまざまですが、今後の健育会の発展に大きく貢献していただける先生ばかりです。宜しくお願いいたします。





懇親会の最後は、私が中締めのおあいさつとして下記の話をしました。

新装されたオークラ東京で医師研修会を開催して、健育会の未来も明るい気がしています。本日の講演は、昔の関塚先生からは想像できないほど立派な経営者としてのお話をいただき、医師はもちろんマネージングディレクターも大変参考になったと思います。やはり医師は、先代理事長が大切にしていた「目の前の患者を救う」という意思だけでなく、本日お聞きしたような経営に関する意識もしっかり持っていなければ、良い医療は実現しないということを再確認してほしいと思います。



私の父である先代理事長は、不二男という名前で、富士山の麓の出身でしたが、あえて富士ではなく不二という字が使われています。その2文字には「一見異なるように見えるものでも、突き詰めると同じになる」という思いが込められていると聞きました。病院における医師には、目の前の患者さんを治すことと病院の経営という2つの役割があり、一見相反することのように感じるかもしれませんが、最終的には同じことを目指すことになると思います。健育会グループは、3年前に大規模な投資を行い、1年間で400床増やしました。これまで経営的に厳しい状況が続きましたが、今年度後半に全病院・施設が予算通りになれば、長い闇から抜け出せる見込みが立っています。ぜひ頑張ってくださいと思います。

令和という新しい時代を迎え、健育会グループ一丸となってより大きな風を起こし、ビジョンの達成を目指してください。関塚先生に教えていただいたように、職員一人ひとりの努力と幸せが病院を大きくし、それが地域医療の向上と地域の幸せにつながります。これからも「目の前の患者さんを救う」という思いを全職員が共有し、社会に貢献し続ける健育会でありたいと願っています。